

# 九州大学総合研究博物館と箱崎キャンパス移転 —— 旧工学部本館への資料集約と開示室の整備 ——

谷澤 亜里・米元 史織・岩永 省三

九州大学総合研究博物館：〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

**要旨：**九州大学総合研究博物館は2000年の設置以来独自の建物を持たず、2005年以降は旧工学部の諸施設を主な収蔵・展示スペースとして利用してきたが、九州大学の箱崎地区からのキャンパス移転の進行に伴って多くの建物が解体されることとなった。そのため、2015年に第一分館（旧工学部知能機械実習工場）から第三分館（旧保存図書館）への移転、2018年に諸施設から旧工学部本館への標本・資料の集約を行った。標本・資料を集約した旧工学部本館では、各分野の標本・資料を収蔵展示する「開示室」を新たに整備し、廊下にも新たに展示コーナーを設け建物全体を博物館として活用している。

**キーワード：**箱崎キャンパス，博物館，標本移転，旧工学部本館

## はじめに

箱崎地区から伊都地区への九州大学のメインキャンパス移転は2005年度から開始され、2018年度をもって終了した。2000年に設置された総合研究博物館は、設置当初は独自の建物を持たなかったことから、キャンパス移転の影響を大きく受けながら活動を続けてきた。本稿では、2018年度のキャンパス移転完了に伴い、旧工学部本館へと資料を集約するに至った経緯をまとめるとともに、旧工学部本館での新たな展示スペースの整備状況を報告したい。

## 1. 旧工学部本館への資料集約の経緯

### (1) 2014年度までの状況

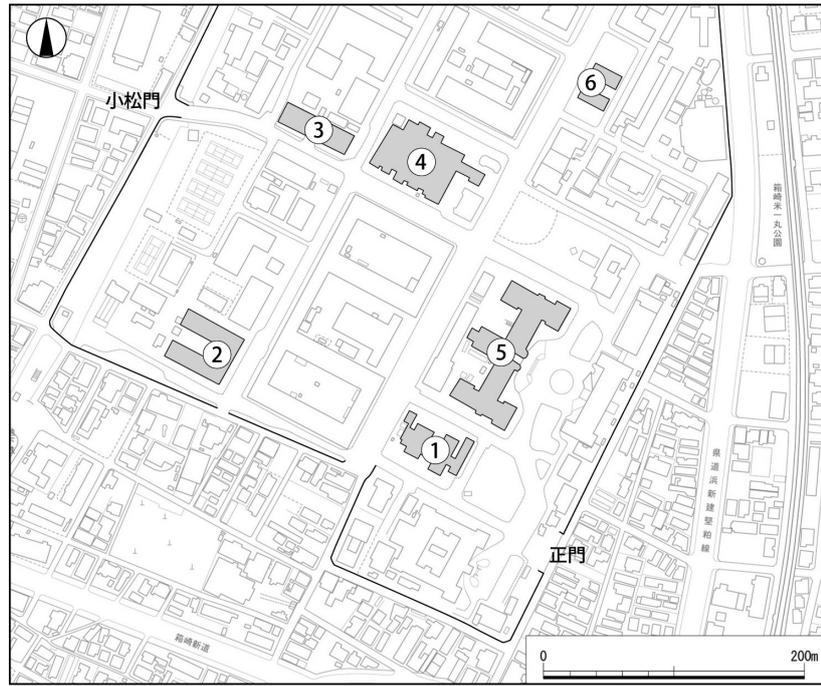
九州大学総合研究博物館は2000年に全学共同施設として設置された。この時点で、箱崎地区から伊都地区へのメインキャンパス移転はすでに確定していたため、移転マスタープランにおいて、箱崎キャンパスには博物館建物を作らず、伊都キャンパスのセンター地区に博物館建

物を建設することとされた<sup>1</sup>。そのため、設置当初の総合研究博物館は、教員の居室としては旧保存図書館建物（図1-①）東端の旧印刷所、展示スペースとしては五十周年記念講堂2・3階（図1-④）を主な拠点としていたものの、収蔵スペースは全く無く、活動・展示・収蔵スペースの不足が常に課題であった。

2005年に工学部の箱崎地区からの移転が始まってからは、旧工学部知能機械実習工場（図1-②）を展示・収蔵スペースとして利用するようになり（後に第一分館と命名）、2007年10月からは旧工学部本館（図1-⑤）に教員研究室、実験室、標本庫を借用することとなった。翌2008年1月には旧工学部本館4階会議室の管理が博物館へ移管され、5月には3階9番講義室を改修した常設展示室をオープンした。これにより、博物館の主な活動拠点は旧工学部本館と第一分館に移った。以上の経緯と第一分館での活動の概要は研究報告第12号と『九州大学百年史』にまとめられている<sup>2</sup>。

### (2) 第一分館から旧工学部食堂・旧工学部本館・旧工学部5号館へ

工学部の伊都への移転後、旧工学部施設の解体が進行



- ① 旧保存図書館 / 博物館第三分館 (2015-2018)
- ② 旧工学部知能機械実習工場 / 博物館第一分館 (2005-2015)
- ③ 旧工学部 4 号館 / 博物館第二分館 (2008-2015)
- ④ 五十周年記念講堂 2 階・3 階常設展示 (2002-2008)、平常展示 (2008-2015)
- ⑤ 旧工学部本館 (2007 使用開始、2018 に標本・資料集約)
- ⑥ 旧工学部 5 号館 (2015-2018 に資料収蔵)

図 1 箱崎地区における総合研究博物館関連建物配置

する中で、2015年度中に第一分館を解体することが決まり、第一分館に所蔵されていたすべての資料の移転が必要となった。該当資料は、古人骨資料、現代人骨資料（戦前～1980年代にかけて医学部に献体されたご遺体）、医学部由来脊椎動物骨格標本、農学部由来動物骨格標本、旧文学部考古学資料、旧玉泉館考古学資料、中山平次郎資料（元寇防塁石材等未整理資料）、旧檜垣文庫民俗学資料、岡崎敬教授蔵書、鏡山猛教授資料、森本文庫、仏教美術写真コレクション、理学部蔵高壮吉鋳物標本（この時点では博物館へ未移管）、学内各所の歴史的什器類（芸工から移管した旧福岡県庁応接室部材・建築模型含む）、工場に残置されていた歴史的な工作機械類、展示具各種、統合移転推進課から預かった伊都キャンパス第12次調査区の製鉄遺構象り資料である。

2014年5月から移転準備が始まり、統合移転推進課から旧保存図書館1階（図1-①）と旧工学部本館（以下、本館とする）（図1-⑤）の地下、旧工学部5号館1階（工作機械用）（図1-⑥）が移転先として提示された。当初、統合移転推進課からは古人骨は本館地下、製鉄遺構象りなどは旧食堂という案が示されたが、湿気に弱い

古人骨資料を地下に置くなどのもつてのほかであるため、2015年1月に古人骨資料・脊椎動物骨格標本を旧食堂に、湿気に比較的強い考古学資料や製鉄遺構象りを本館地下に置くことを主軸に、移転先の割り振りを決めた。

旧保存図書館には古人骨資料・現代人骨資料・医学部由来脊椎動物骨格標本・農学部由来動物骨格標本に加えて高壮吉鋳物標本・岡崎敬教授蔵書・森本文庫・鏡山猛教授資料・中山平次郎資料、本館地下には旧文学部考古学資料・旧玉泉館考古学資料・製鉄遺構象りに加えて檜垣文庫民俗学資料・歴史的什器類・展示具各種・製鉄遺構象り（小）・第一分館機械工場床面から外した木レンガ、旧5号館には歴史的な工作機械類・製鉄遺構象り（大）を納めることとした。また、岡崎敬教授蔵書は膨大な量があったため、記録資料館のスペースを一部借り配架した。

2015年7月から旧保存図書館1階の旧工学部食堂の改修を行い、10～11月で移転作業を実施した。その後、旧保存図書館1階を「第三分館」と命名した。

この移転で生じた問題点を列記しておく。

人骨資料の第一分館から第三分館への移転に際し、献

体された教授の遺骨（5体）は医学部に置くべきだとする今泉理事の指示によって、医学部と交渉し基礎研究B棟に1室を借用し2015年6月にそこに安置した。また今泉理事からは教授遺骨以外の現代人骨資料も医学部に移すように指示があったが、医学部から部屋の借用が断られたため、第三分館に納めた。

旧食堂はダイニング・教官食堂・厨房・スタッフ控室・倉庫に分かれており、ダイニングに脊椎動物交連骨格標本と高牡吉鮎物標本・農学部由来動物骨格標本、教官食堂に古人骨資料、厨房に古人骨資料・岡崎敬教授蔵書、倉庫に現代人骨資料、スタッフ控室・倉庫に岡崎敬教授蔵書・森本文庫・鏡山猛教授資料・中山平次郎資料を納めることとなったが（図2）、厨房は調理器具が林立し油で酷く汚れていたため、床・壁の大規模な改修工事が必要となった。また旧食堂床面は地表より1mほど高いが湿気がひどく、移転後2016年6月に、動物骨格標本に白カビが発生していることが確認された。この除去作業には多大の労力を費やし、除湿器3台を設置、なにわホネホネ団（大阪市立自然史博物館を拠点に活動している骨格標本作成サークル）の協力・指導を受け、すべての標本のカビ除去作業を行った<sup>3</sup>。

第三分館は、面積が第一分館より狭くなったため、第一分館2階にあった人骨展示室が消滅を余儀なくされ、第一分館では1室に収まっていた岡崎文庫の置き場所が3カ所に分かれてしまった。また第一分館2階にあった作業・演習室は旧食堂の裏手にあった旧印刷所の地下に移したが、シロアリの被害が酷い部屋であった。

本館の地下も湿気が酷く、排水ポンプが故障すると壁から浸水し、大雨の後には床から水が沁み出るような劣悪な場所で、本来博物館資料の収蔵に適した場所ではないが、この移転の時点では本館の地上階がまだ空いていなかったために、考古学資料・檜垣文庫民俗学資料・歴史的什器を納めざるを得なかった。移転後、比較的湿気に強い考古学資料でもカビは発生し、木や紙が材質である檜垣文庫民俗学資料・歴史的什器類は大きな危険にさらされることとなった。

第一分館の旧工場建屋に設置されていた歴史的作機械類は、極めて重く通常の建物では床が持たないために、旧工学部5号館1階の土間床の部屋・実験室に納めた。この重量の重さと湿気を嫌う点がその後も問題となった。

なお、第一分館から動物骨格標本を第三分館に移すの

と並行して、2012年6月に農学部動物学教室から当館に移管され記念講堂3階ロビー・第一分館1階に収蔵展示していた動物骨格標本・剥製は第三分館1階に移し、他の動物骨格標本と合併させた。

また旧工学部2号館の材料強弱学教室から2014年10月に当館に移管された機械類は旧印刷所地下と第一分館に移していたが、第一分館の物は旧工学部5号館に移した。

### (3) 第三分館における活動状況

旧食堂ダイニングの改装により、動物骨格標本と高牡吉鮎物標本は、第一分館時代よりも広々としたスペースでの収蔵展示が可能となった。このスペースは、開学記念行事やオープンキャンパスにあわせて、年に2回ほどの一般公開を行った。また、九州産業大学美術館主催の体験学習プログラム「キッズ・ミュージアム・スクール」や Skype を用いた遠隔授業コンテンツ作成への協力など外部機関への協力を通じて、骨格標本や鮎物標本の活用を行った<sup>4</sup>。

また、第三分館と本館地下は環境こそ収蔵に適したものではなかったが、第一分館よりもやや広い作業スペースを有していたため、考古資料群と岡崎敬教授蔵書、脊椎動物骨格標本・古人骨資料の位置情報の把握を含めたデータベース化作業を、移転後の2016年から本格的に開始した。作業は、技術補佐員・アルバイトの学生の協力のもと順調に進行し、基礎となるデータベース化作業が2017年までにおおむね完了した。主な作業としては以下のとおりである。

これまで『日本民族・文化の生成』<sup>5</sup>に一覧と計測値などが提示されるのみであった古人骨資料のリストを作成、各資料が収められているキャビネット番号とデータの紐付け、一部標本の写真撮影を行った。その過程で、『日本民族・文化の生成』には未掲載の資料がいくつか発見されており、今後整理を進め報告を行いたい。現代人骨資料については医学部由来のカルテデータのエクセルへの入力、各資料が収められているキャビネット番号とデータの紐付けを行った。また、古人骨資料に関連する記録資料も多数確認され、キャビネット番号がLから始まる資料であるためL番資料と名付け、現在整理を行っている。

脊椎動物骨格標本群についても各動物骨に振られた番号と展示されているケースあるいは収蔵されているキャ

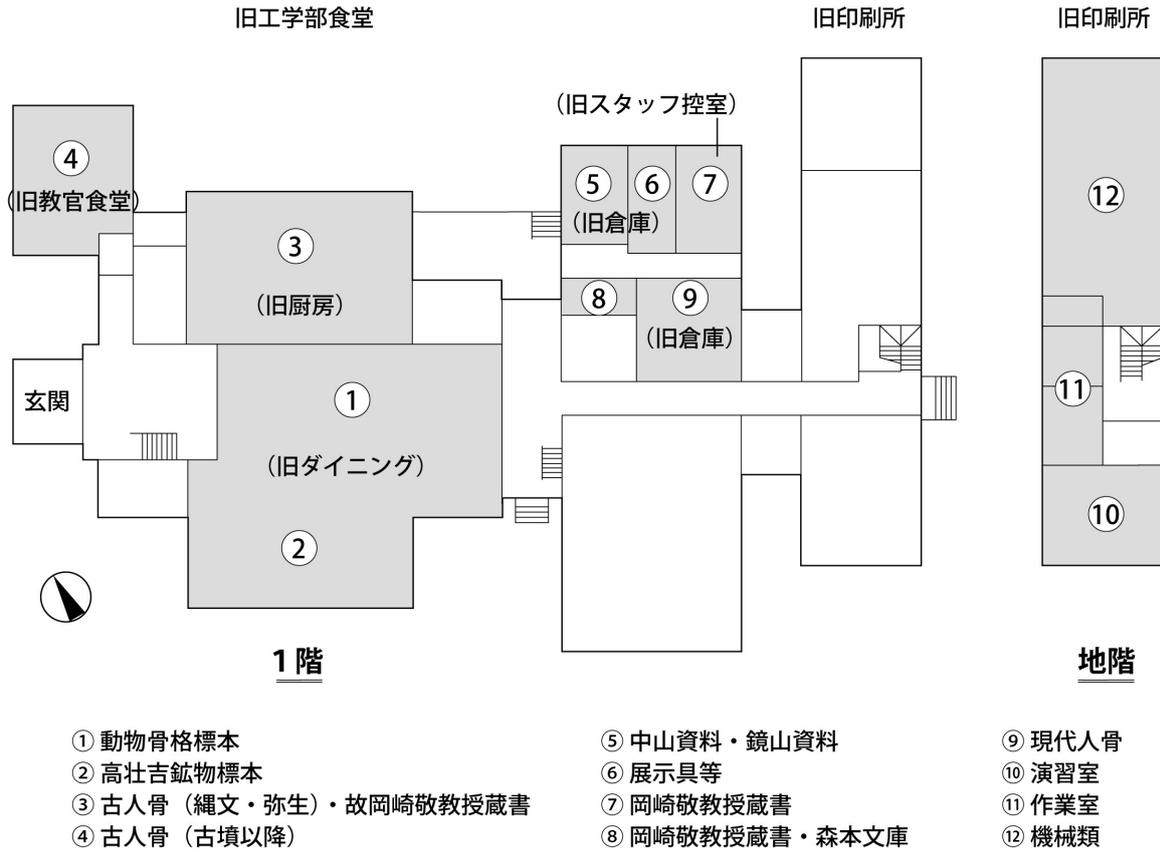


図2 第三分館（旧保存図書館）の使用状況（トーンが博物館使用スペース）



1 第三分館外観



2 改修前の旧工学部食堂  
(手前がダイニング、奥の壁の向こうが厨房)



3 動物骨格標本の一般公開



4 旧厨房での古人骨収蔵状況

写真1 第三分館（旧保存図書館）

ビネット番号を紐付け、位置情報の把握、一部資料の写真撮影を行った。

農学部由来動物骨格標本資料については、移管された際に移管資料に関する情報がなく、種同定が雑駁になされるのみであり、牛の肋骨がキリンの肋骨とされているなど一部に混乱も生じていた。そのため、種同定及び個体識別の確認の後、各資料に番号をふり、写真撮影、キャビネット番号との紐付けを行い位置情報の把握、カタログの作成を行った。

岡崎敬教授蔵書に関しては、第三分館および記録資料館の作業スペースに一度すべて配架することができたため、書籍に番号を振り、書誌情報をエクセルに入力し、寄贈された書籍の内容の把握・データ化を行った。登録された蔵書は11942冊に及ぶ。中国語の貴重な書籍も多数含まれており、岡崎敬教授の学問世界の幅広さを示す重要な書籍群である。それ以外にも岡崎教授・鏡山教授がそれぞれ調査に用いた写真や記録資料、メモなども多数発見され、現在それらの整理を進めている。

旧玉泉館考古資料については、本館地下を作業スペースに、各資料に振られた番号に従い、教養部時代に作成された遺物カードと照会し、各遺物の写真を撮影、収蔵されているコンテナとコンテナを収めた棚それぞれに番号をふり、位置情報を把握、カタログの作成を行った。カタログに登録された旧玉泉館資料の総数は4698点である。また、作業の過程で旧玉泉館番号が振られていない資料が518点発見されたため、2016年資料として新たに登録しカタログ作成を行った。

旧文学部考古学資料のうち、甕棺資料については、汚れが目立ったため、クリーニング作業を行い、その後各資料に番号を振り、写真撮影、位置情報の把握、カタログの作成を行った。資料数は94点で、これら資料の型式の同定については地球社会統合科学府の大学院生(当時)梶原慎司氏が行った。その他、未整理資料が48箱確認されている。

以上のデータベース化された資料は、九州大学総合研究博物館データベースにて2021年1月より公開されている<sup>6</sup>。

#### (4) 第三分館等から本館へ

2015年以降、旧工学部施設の解体が進行するとともに、理学部・農学部・文系地区も順次移転準備が始まった。

大学からは箱崎キャンパス内の旧工学部施設(博物館第三分館、五十周年記念講堂・旧工学部3号館・4号館(博物館第二分館)・5号館)、理学部・農学部に散在する博物館関係資料を本館に集約する方針が示された。ただし、博物館の総面積は4000㎡以内と決められていることから、それを超えない範囲で、本館内のすでに空いている部屋や今後空く部屋に順次資料を移転することとし、2017年10月から資料の移転先の検討を開始し、2018年9～10月に移転作業を行った。

##### A. 第三分館から本館へ

脊椎動物骨格標本および剥製は本館3階中央部に移した(動物骨格標本開示室、図3-⑨)。

古人骨資料・現代人骨資料については、将来の伊都キャンパスへの移転・集約を見越して、すべてをイースト地区1号館1階の全学共用スペース2部屋に移すことを考えて申請したが、2017年10月にC103号室のみの使用許可が下りた。そこで、砂丘から出土した堅質の資料のみをC103号室に移し、他は本館2階南翼に移した。その際、第三分館ではなくなっていた人骨展示室を復活した(人骨資料開示室、図3-①)。第三分館で旧教官食堂に入れていた旧農学部動物学教室由来の動物骨格標本は本館2階南翼に移した。第三分館で現代人骨資料と同じ部屋に入れていたミイラ1点は、ケースが大きく本館のドアを通らないことから、伊都C103号室に移した。

高牡吉鉱物標本は本館2階中央部に移したが3部屋に分けざるを得ずやや狭苦しくなった(高牡吉鉱物標本開示室I～III、図3-③～⑤)。

旧食堂厨房とスタッフ控室、記録資料館に分かれていた岡崎文庫は、本館3階書庫の中2階に集約した。

なお、2015年の移転で第一分館から本館地下に移していた檜垣文庫民俗学資料を本館2階南翼に上げた。旧印刷所地下に仮置きしていた旧材料強弱学教室の機械類はあまりに重く取り扱いが困難な事から廃棄することとなった。

##### B. 記念講堂から本館へ

記念講堂3階の動物剥製類は本館3階に移し、第三分館から移した剥製と同室に納めた(動物剥製標本開示室、図3-⑧)。記念講堂3階の昆虫標本は本館2階北翼に移した。記念講堂4階の資源工学関係文書と協力研究員室は本館3階に移した。なお記念講堂2階ホワイエにあった展示ケース類は、2008年に本館3階に常設展示室が開

設された際に移動済みであったが、記念講堂に残っていた他の展示具は本館の地下に移した。

### C. 理学部・農学部等から本館へ

2017年の理学部移転に際して救出した歴史的什器類は本館2・3階の廊下に仮置きし現在に至る。当館に移管予定の地球惑星科学関係の資料は、理学部移転後も理学部棟に残置仮置きしていたが、2018年の理学部棟の解体前に当館に移管し本館に移した。松隈元館長が収集した貝類標本と前田教授が収集した多量のアンモナイト標本も本館に収納した。

農学部の植物標本のうち、2014年に当館に移管し中央図書館5階に仮置きしていた標本を、2018年の図書館棟の解体前に本館2階に収納した。農学部倉庫から発見された第二次大戦前の古い標本や教育掛図なども本館2階に収納した。

### D. 学外から本館へ

映像作家田村悟史氏の収集コレクション（手回し蓄音機・SPレコード等）は2015年に受贈し、手回し蓄音機は4階の壁画会議室に置き、他は本館内数カ所に分けて仮

置きしていたが2018年に本館2階にまとめた。

### (5) 本館に納められなかった資料

#### A. 5号館収蔵資料の取り扱い

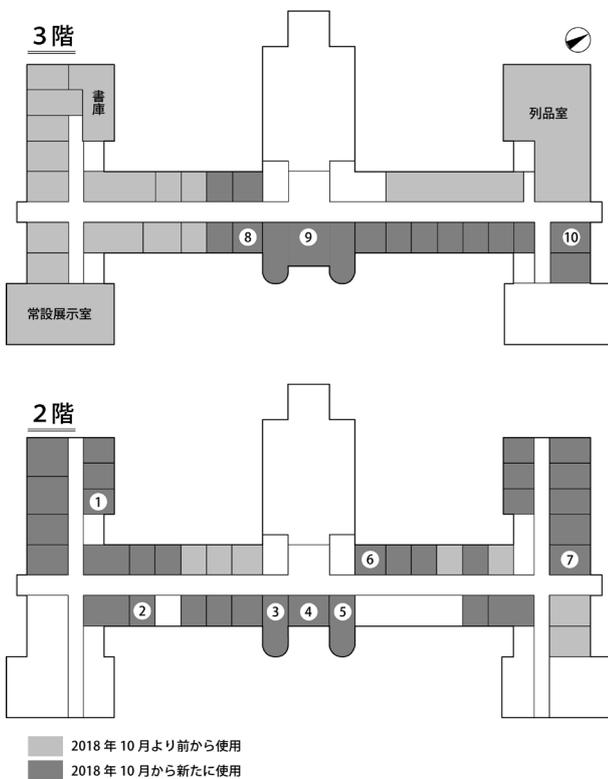
5号館1階に置いていた歴史的工作機械類・製鉄遺構象り（大）は、法量が大きく重いため、学内に適当な保管場所が見つからず移転先に苦慮したが、福岡市内の大型倉庫を借用し仮置きしている。なお工作機械の一部は工学部の理解のもと、伊都キャンパス・ウエストゾーン西講義棟1階に設けられた展示場に移設され公開されている。

#### B. その他

2008年に九大病院から当館に移管し、4号館1・2階に納めていた九大病院カルテは、公文書管理法・情報公開法の施行に伴い当館で管理することが不適切となったため、九大病院に返却した。4号館2階の昆虫標本は本館2階北翼に移した。

第一分館閉鎖以前に学内各所から収集し第一分館およびその西側の機械工学実験室に置いていた歴史的什器類は、第一分館の閉鎖に際し、本館地下に納めたが、その部屋を大学に返還する必要が生じたため、学外に倉庫を借用し仮置きしている。

理学部・農学部・文系地区の移転に伴って収集した歴史的什器類は、旧工学部3号館に仮置きしていたが、同館の閉鎖に際し、学外に倉庫を借用し仮置きしている。



- ① 人骨資料開示室
- ② 植物資料開示室
- ③ 高辻吉鉱物標本第一開示室
- ④ 高辻吉鉱物標本第二開示室
- ⑤ 高辻吉鉱物標本第三開示室
- ⑥ 化石閲覧開示室
- ⑦ 昆虫標本開示室
- ⑧ 動物剥製標本開示室
- ⑨ 動物骨格標本開示室
- ⑩ 工学系資料開示室

図3 旧工学部本館の使用状況

## 2. 旧工学部本館における展示の整備

### (1) 開示室の整備

以上で述べた経緯のもと、2018年10月以降は旧工学部本館のうち88室3,935㎡を博物館が利用することとなった。この際に、2階と3階の10室を、資料の収蔵展示を行う「開示室」として新たに整備した(図3)。開示室内の展示は各分野の教員が担当した。各室の内容は以下の通りである(写真2)。

人骨資料開示室(①)は、第三分館から移転した古人骨資料の一部を展示している。展示内容は、第一分館時代に2階で行っていた展示をベースとしている。

植物資料開示室(②)は、本学の戦前資料を中心に植物標本の一部を紹介している。展示棚にはキャンパス移



写真2 各開示室内の様子（番号は図3と共通）

転に伴いレスキューされた歴史的什器が多数用いられている。

高壮吉鉱物標本開示室(③～⑤)では、第三分館から移転した高壮吉鉱物標本を三室に分けて収蔵展示している。

化石閲覧開示室(⑥)は、本学教員が海外学術調査等によって採集したアンモナイト化石、および九大初のクラウドファンディング「九州大学オール・アンモナイトプロジェクト」で収集した世界各地のアンモナイト化石を展示している。

昆虫標本開示室(⑦)は、日本最大の標本の収蔵数を誇る本学の昆虫標本のうち、美しいものを中心に展示している。当開示室も、キャンパス移転に伴いレスキューされた歴史的什器を展示に活用している。

動物剥製標本室(⑧)は鳥獣類の剥製標本を展示している。標本は、農学部から移管されたものと、2012～2013年に糸島市周辺で収集し新たに収蔵したものからなる。

動物骨格標本開示室(⑨)は、第三分館から移転した動物骨格標本を収蔵展示している。

工学系資料開示室(⑩)では、工学部列品室に収蔵されている鉱山関連資料の一部や、医学部から移管されたX線管球などを展示している。当開示室は、キャンパス移転に伴いレスキューされた歴史的什器のほか、第三分館の実習工場の工作機械の周りに敷かれていた木レンガも活用して展示空間を構成している。

以上の新設された開示室と、常設展示室(2008年新設)、4階会議室(2008年に移管)や工学部列品室(2015年に移管)を活用することで、総合研究博物館は旧工学部本館を拠点として本格的な展示活動を行うことが可能となった。

## (2) 廊下展示の整備

開示室を整備した翌年の2019年には、旧工学部本館での展示活動をより効果的に行うため、2階・3階の廊下のリニューアルを行った。具体的に行った作業は、a)各開示室前のバナーの設置と、b)廊下への展示ケースの新設、の2点である。

a) 開示室前のバナーの設置 開示室は旧工学部本館の2階・3階に点在しており、どの部屋で展示を行っているのかがわかりにくい状態であった。この問題を解決す

るため、各開示室へと来館者を誘導する布製バナー(幅60cm、長さ290cm)を設置した(写真3)。バナーには、各部屋でどのような標本を展示しているかが一目でわかるように、開示室名に加えて標本・資料の写真をあしらっている。

b) 廊下への展示ケースの新設 開示室の間をつなぐ廊下を展示空間として有効に活用するため、2階・3階の廊下に新しく展示ケースを設置した。これらの展示ケースには、これまで当館の常設展示室で使用していたものに加え、キャンパス移転に伴いレスキューされた歴史的什器も活用した。具体例を二つ挙げる(写真4)。Aは、書棚の前面にアクリル板を取り付け、展示棚として使えるようにリメイクを行ったものである。Bは、歴史的什器の平机の上にアクリルケースを載せたものである。アクリルケースの土台は、什器と馴染むように濃色の木目調のものを採用した。A・Bともに、現在は動物骨格標本の展示に活用している。

このほか、田村悟史コレクションのSPレコードや、昆虫、古生物・現生貝類についても、各分野の教員が担当して、資料の収蔵スペースや関連する開示室の近くにミニ展示を設置した。また、2019年度の特別展示として「よりぬき玉泉館」、「うつわと九大——其の三——」と題した考古資料の展示を行ったが、これらも廊下の展示スペースを活用して実施した。

なお、以上のa)とb)での歴史的什器の展示ケースへのリメイクにあたっては、発案から実現に至るまで、株式会社ケイ・ネットワークの松原憲治氏から助言と協力をいただいた。

## (3) 新設展示の活用状況

現在の総合研究博物館では、設備や人的資源の問題から、各開示室を常設展示として公開するのは困難であるため、年に2回程度の一般公開を行っている。

開示室を整備した2018年は、公開展示の一環として開示室と常設展示室、列品室、4階会議室を教員の解説付きツアーで巡る「本館まるごと博物館」を開催した。開催日は12月の1・2日、8・9日、15・16日、22・23日の土日の8日間であり、各日ともに、午前、午後前半、午後後半の3回のツアーを実施した。参加者は延べ432人となった。また、2018年2月8日(金)は、箱崎キャンパス閉校式として「ありがとう箱崎」が開催されたが、



写真3 バナーの設置状況



A-1 改造前の書棚



A-2 改造後の展示ケースとしての使用状況



B-1 平机



B-2 アクリルケースを載せての展示状況

写真4 救済什器を活用した展示ケースの新設

これに合わせて総合研究博物館は開示室、列品室、4階会議室の一般公開を行った。

2019年度は、福岡ミュージアムウィークに合わせて5月18日(土)・19日(日)・25日(土)・26日(日)に一般公開を行った。また、11月には公開展示「博物の森へようこそ」と題して一般公開を行い、9日(土)・10日(日)・16日(土)・17日(日)の4日間で参加者は569名となった。また、公開展示においては、各日に1回「博物館地下探検」と題し、地階での旧玉泉館考古資料や甕棺資料、伊都キャンパス第12次調査区の製鉄遺構象り資料等の収蔵状況を見学するバックヤードツアーを実施した。

その後も旧工学部本館を拠点とした展示活動を継続する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、2020年3月から総合研究博物館は臨時休館することとなった。これを受け、自宅から博物館の展示を楽しんでいただくための取り組みとして、各開示室の360°写真と教員の解説をウェブページ「ぐるっと九大博 旧工学部本館パノラマビュー」にて公開した<sup>7</sup>。本ウェブページは、RICOHのTHETA Vを用いて撮影した360°写真を、同社の360°写真共有サービスTHETA 360にアップロードし、これをウェブページに埋め込むかたちで作成した。ブラウザ上で写真をドラッグすることで、上下左右360°方向を見ることができるようになっている。6月15日(月)に公開をはじめ、2021年1月現在までに累計1100件以上の閲覧数を得ている。総合研究博物館の臨時休館は現在まで続いているが、開館を再開した場合にも開示室を常時一般公開するのは困難であるため、本ウェブページの機能は今後も必要とされ続けると見込まれる。

## おわりに

以上でみてきたように、総合研究博物館は、設置20年

目にしてようやく旧工学部本館に標本・資料を集約し、これを活かした展示が可能となった。その経緯と概要を記した本稿が、これからの博物館のあるべき姿を考え実践するにあたっての一助となれば幸いである。

なお、本稿は1-(2)・(4)・(5)を岩永、1-(3)を米元が執筆し、残りの文章の執筆と全体の調整を谷澤が行った。

## 注

- 1 九州大学編(2001)九州大学新キャンパスマスタープラン2001. <http://suisin.jimu.kyushu-u.ac.jp/archive/plan/master/index.html>
- 2 三島美佐子・岩永省三(2014)九州大学蔵合研究博物館・第一分館の刷新的利活用(1)経緯.九州大学総合研究博物館研究報告 12, 57-66.  
岩永省三(2017)第34編:総合研究博物館.九州大学百年史 第7巻:部局史編IV(九州大学百年史編集委員会編).九州大学. [https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac\\_download\\_md/1801803/author\\_figure\\_colophon.pdf](https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_download_md/1801803/author_figure_colophon.pdf)
- 3 作業は、表面のカビを清掃し、その後展示ケースをアルコールで殺菌、標本もアルコールでクリーニングし、アルコールを染み込ませたシートを標本に巻き付け、ビニールで密封し、燻蒸を行った。
- 4 Moreno Q.J., Izumoto C., Kaneko K., Yonemoto S., Kim D. (2016) Planning and Developing a Museum Outreach Program for Schools -Bringing educational content from the museum to the classroom through digital and physical materials-. *International journal of Asia digital art and design*, 20(2), 51-59.
- 5 九州大学医学部解剖学第二講座(1988)九州大学医学部解剖学第二講座所蔵古人骨資料集成.日本民族・文化の生成2.六興出版.
- 6 <http://db.museum.kyushu-u.ac.jp/jp/>
- 7 <http://www.museum.kyushu-u.ac.jp/panoramaview/index.html>

Received February 2, 2021; accepted February 16, 2021

ぐるっと九大博  
旧工学部本館パノラマビュー



- TOP
- 旧工学部本館
- 壁面の会議室
- 工学部列品室
- 工学系資料開示室
- 高辻吉鋺物標本開示室
- 化石開覧開示室
- 昆虫標本開示室
- 植物資料開示室
- 動物剥製標本開示室
- 動物骨格標本開示室
- 人骨資料開示室
- 常設展示室



九州大学が収蔵する様々な分野の学術標本・資料のうち約145万点が箱崎地区の旧工学部本館に収蔵されています。資料の一部は3階の常設展示室と、館内各所の「開示室」で公開しています。このページでは、各開示室を360°写真とともに紹介します。

常設展示室を除く各開示室は、年に2回ほど不定期で公開しています。開示室の一般公開に関する情報は、総合研究博物館ホームページでお知らせします。

現在、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）拡大防止のため、総合研究博物館は休館しています。当館がある箱崎キャンパス内へも立入禁止になっています。休館があけるまで、こちらの仮想展示をお楽しみください。

### 1 ウェブサイトのメインビジュアル



2 360° 写真（工学系資料開示室）

### 工学系資料開示室



ドラッグすると上下左右360度方向を見ることができます。右下のボタンで拡大・縮小できます。

嵐山開運の燈火（とうか）や救急装備、製錬産物、医学部から移管されたX線管球（詳細はこちら）などを展示しています。展示用の什器は全て、伊都キャンパスへの移転の際に救済した木製家具です。また、床半分敷いてある木レンガは工学部機械学科の実習工場（知能機械実習工場）の床面から回収した

3 ウェブ展示の様子

図4 ウェブ展示「ぐるっと九大博」

谷澤 亜里・米元 史織・岩永 省三

**The Kyushu University museum and the relocation of the Hakozaki campus:  
the renewal of the exhibition and the storage**

Ari TANIZAWA, Shiori YONEMOTO and Shozo IWANAGA

The Kyushu University Museum, Hakozaki 6-10-1, Higashi-ku, Fukuoka, 812-8581, Japan